京都市教育学講座 7

「高校教育への接続　～小中高一体での“自立する 18 歳の育成”のために～」

堀川高等学校校長　恩田　徹

【自立すること】

本校の目標は「自立する 18 歳の育成」です。自立とは何かということですが，経済的に自立しようと思うとなかなか難しいです。就職又はアルバイトをしてお金を稼がないといけません。自立とは，「選ぶこと」「決定すること」です。

義務教育ではない高校は選ばれる存在感をもつ必要があります。第 1 回の京都市教育学講座で講義いただいた荒瀬先生がおっしゃったのですが，昨今求められている高校の選択基準は「安全・安心・簡単・手軽」です。つまり，ここの高校に行けば「難関大学に行かせてくれる」「塾の代わりに補習もしてくれる」「いじめを絶対に防いでくれる」「子どもが泣いていたら泣き止ませてくれる」「海外旅行を完全に安全に行かせてくれる」ということです。子どもに苦労させたくないし，泣かせたくない，これが親心です。日本はこういう社会です。本当に豊かで平和な社会です。

しかし，海外はもとより社会へ出るとすぐにわかりますが，世の中は，危険で不安で複雑で面倒なことばかりです。堀川高校のように物事の決定を生徒に委ねている学校の子どもたちは本当にたくさん悩みます。文化祭を自分たちで作り上げていく中で誰をキャスティングするかでもめています。海外研修でどこに行くのか意見が割れたら，先生が間に入って交通整理することが普通ですが，それをやりません。子どもたちがぶつかって解決します。失敗してもいいです。傷ついてもいいです。それが世の中では当り前だからです。面倒なことをたくさん体験するような学校にしていきたいです。

高校は義務教育ではありませんし，他にも高校があるわけですから，面倒なことが嫌なら学校を変えればいいことです。しかし，そうならないように本当に自分がやりたいことができる，また挑戦できるような高校をどうやって選ぶか，これが中学校と高校の大きな問題です。「入学させた以上は何とかしてください！」という考え方もありますが，堀川高校では危険で不安で複雑な面倒な問題を子どもたちが自分たちで解決しようとします。難関大学や一流企業に入れば安泰である時代ではありません。わかっているけれどもそれに代わる確かなものがありません。当り前です。確かなものなんて今の世の中にありません。だから堀川高校では探究活動をしています。答えのないことを追い求める教育です。堀川高校は，解決が困難なことに立ち向う場面が多

く，傷つくことも多い学校です。

もちろん学校が安全であることは当たり前です。最低の安全，生命と身体の安全は確保しなければなりません。リスクマネジメントが必要です。問題に対しては，スピード感を持ちながら，温かみのある指導ができる体制にしています。そのうえで「安全に失敗させてやる」ことではないかと思っています。

【探究活動／リターンがないからやる価値がある】

大学の入試改革が議論されています。今後の入試においては，知識だけを問うのではなく，知識を活用し，身に付けた思考力・判断力・表現力が評価されることになるでしょう。このことは，堀川高校が探究基礎の授業で行っていることと同じです。堀川高校では答えのない自分のテーマを探していきます。一人一テーマで一論文です。探究したことを２年生の９月には，ポスター発表します。そこで質問されることが論文を書く上で参考になります。

答えがないので，大学入試で一点もプラスになりません。多少の応用力はつくかもしれませんが，入試対策には一切なりません。私は一点にもならないからこそ価値があると思います。入試にプラス，評価されるのならば，入試や評価がゴールになってしまいます。学ぶことは，しんどいけれども楽しいと思える瞬間が高校三年間の中で味わえます。これは本当にすごいことだと思っています。

1990年から2006年までの学習習慣の調査結果があります。1990年と2006年を比較すると，偏差値50～55という一番多いボリュームゾーンと呼ばれる人たちは，学校外における平日の学習時間が半減しています。偏差値55以上の人たちはさほど変わっていません。偏差値45未満の人たちは相変わらず全然勉強していません。

偏差値50～55の人たちの学習時間が半減した理由はわかりますか。

理由はボリュームゾーンが目指す大学に入りやすくなったからです。子どもの数が減っても大学の数は減っていません。難関大学は相変わらず難関です。つまり，これは入試のために勉強しているということです。先ほども伝えたリターンや結果がゴールの勉強です。「むなしくないですか？」という話です。中学生や高校生には，「勉強することが面白い」と思える学習習慣を身に付けることにチャレンジしてほしいです。

【高校生の現状／人の成功に拍手を送ることができるか】

日本青少年研究所は，「自分の性格評価」を日米中韓の４か国で調査しています。「物事に積極的に取り組むほうだ」という問いに対して，「よくあてはまる」「まああてはまる」「あまりあてはまらない」「全くあてはまらない」の４択です。「よくあてはまる」「まああてはまる」の率は，日本60％，アメリカ・中国80％超，韓国70％です。日本の高校生は謙虚です。積極的に取り組むけれどもパーフェクトじゃないから「あまりあてはまらない」にしたのかもしれないと思いました。

もう一つ問いがあります。日本が40%，その他は80%以上のものです。日本が他の国の半分のこれは何かというと「私は価値のある人間である」という問いに対して「よくあてはまる」「まああてはまる」が40%です。彼らは自信がありません。要は，社会で自分が貢献していく，役立っていくことに自信がない，ということです。これは，人の成功に拍手を送れるかどうかではないか，と私は思っています。自分に自信がない，満足していないときは，拍手を送ることができません。勝たなかったら負けという評価尺度は，このような人間ばかりを育ててしまうことになります。一等賞以外にも価値があります。みんなと違うことをがんばればいいのです。また，留学したいと考えている高校生の割合は日本が一番低いです。理由は，自分の国が暮らしやすいし，言葉の壁があるし，一人で生活する自信がない，そして，面倒だからです。これが高校生の現状です。

【チャレンジ／二兎を追う】

失敗すること以上にチャレンジすることは絶対に必要です。「能力」「意欲」「人間的な魅力」この３つを高校ではいろんな場面で評価尺度にして育てていくことが大事です。この３つは掛け算の関係になるので，保護者の協力も得ながら，上手くいけば，生徒が大きく成長する可能性があります。だから，堀川高校は困難であるが，二兎を追います。二兎とは「日常の勉強」と「探究活動」です。行きたい大学へ行くために受験勉強をしながら，探究活動も行い，結果を出します。残念だけれども，能力も意欲も本当に素晴らしくても，「ルールを破る」「人の足を引っ張る」「ネットに悪口を書く」場合などは，マイナスになります。

「二兎を追えば一頭も得ず」と言います

が，失敗する特権を大学生までは誰もが持っています。堀川高校の授業はハードです。ついていくことが大変です。でも，これが当たり前の世界です。「授業に余裕でついていける高校なんか行く価値がない」と中学生に言っています。社会に出る優秀な人に求められていることは，例えると100キロで走行する車を運転しながら悪い部分を治すことができる力です。そうでなければ，想定外の事故などに対処できません。「極めて困難であることを優秀な人がやらなくて，誰がやるのか！」それぐらいのつもりで授業を行っています。是非，みなさん，答えのない問いを一緒に取り組みましょう。そして偏差値ではなく進むための志で進路を選ぶ若者を見守りたいと思っています。

【塾生レポート】　受講して学んだこと

１　全体会

講義では，生涯において「生きる力」を付ける教育が堀川高校にあるのだと感じました。探究科についてはテレビで見たこともあり，どのようなことをするかは大体知っていましたが，“泥だんご”について研究した生徒の話を聞いて，生徒の歩んできた環境や知識がそのような考えにたどり着くのだと思い，「型がなければ型は破れない」という言葉を思い出しました。基礎的・基本的な知識，技能を身に付け，普段から「なぜ」や「知りたい」と思う力を小学校からつけておくことが大切だと考えました。また，「高校から情の勉強をするのは遅い」という言葉を聞き，改めて小学校での道徳教育の大切さに気付きました。社会に出て，人と関わることが楽しいと思える人でないと，どれだけ勉強ができても苦労するということは「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」の３つをバランスよく育むことにつながるのだと分かりました。

２　分散会

分散会では，「探究心を育むにはどういった教育をすればよいのか」を小・中での取組を中心に考えました。答えのない問いについて考えるためにディベートし，自分と価値観の違う人も受け入れ認めるという学習集団をつくり話し合いを進めることや，生活科や総合的な学習の時間で，探究心をもつ喜びを味わえるような価値のある問題を設定することを大事にするといった意見が出ました。「命を守り抜く」という理念のもと，危険なことから回避する力を子どもたちにどのようにしてつけたらよいのか不安も感じました。

３　まとめ

教えたくてもすぐに答えを言わないように我慢し，正解が出てもすぐに「合っている」と授業を進めるのではなく，「この考えについてどう思う？」と尋ね，学習を進めていこうと思いました。

コメント

子どもたちに「なぜ？」をもとに「自分の頭で考え判断し表現する」というワクワク学ぶ体験を通して，学び続ける力（生きる力）を育てるのが教師の使命です。小学校段階でやるべきことについて様々な視点から考察していますね。さらに学校現場での具体的な指導を通して，学びを深めてください。

京都市教育学講座８（高等学校専門講座）

「高等学校における教師の実践」

学校指導課指導主事　景山　晋之介

【小中学校と高校の違い】

小中学校と高校で何が違うと思いますか。今日はその違いを，教育課程，義務教育かそうでないか，児童生徒の発達段階という３観点から考えてみましょう。

まず教育課程について，学校教育法施行規則の小中高の記述を読み比べてみると，高校は教科の構成が学校裁量であること，教科が科目に細分化される点等が大きな特徴です。

次に義務教育でない点について，学習指導要領の総則の目次を小中と見比べると，高校のみ単位修得と卒業認定に関する記述があることが目につきます。修得とは，教科等の成果が目標からみて満足できることを指し，卒業の認定には，学校の定める単位数（ただし 74 単位以上）の修得が必要です。

最後に，発達段階の点について言えば，現在，日本では中学校卒業者の 98％が高校に進学しており，高校は事実上，「社会で生きていくために必要となる力を共通して身に付けることのできる，初等中等教育最後の教育機関」であるといえます。

小中高それぞれで責任の重点に違いがあると思いますが，上記の３観点から，私は高校あるいは高校教師に特有の責任を，以下の３つに整理して捉えています。

１．教育課程を全面的に自分たちで組み立てる責任
２．修得に関わる評価の妥当性・信頼性への責任
３．社会に出る前の最後の段階の人間に関わる責任

【私立と公立の違い】

次に，私立と公立の違いは何でしょうか。私立も学習指導要領に則って教育活動を行う点は同じです。公立は，例えば財源が税金である点，複数の学校がある点が私学と異なるでしょう。複数の学校があるというのは，端的にいえば，皆さんが採用される時は学校単位でなく，都道府県あるいは政令市に採用されるということです。これらをもとに，公立校教員特有の責任を整理すれば，私は以下のようになると考えています。

１．（キャリア全体では）採用された自治体の全高校の生徒に対して責任を負う
２．ひいては市民（都道府県民）に対して責任を負う
３．多様な背景を持って入学してくる生徒に対して責任を負う

もちろん，第一義的には配属校の生徒た

ちに対して責任を負いますが，公立校の教員には異動が伴います。その自治体のどの高校にも異動する可能性があるということは，特定の高校で勤務したい，あるいは勤務できないという姿勢は通用しないということです。その意味で，キャリア全体では全高校の生徒に対して責任を負うといいました。

また，財源が税金であることは，ひいては市民（都道府県民）に対して責任を負うことでもあります。私立は理事長や校長が理想と考える教育方針を自由に設定できますが，市立高校は市民や地域が望み，期待する特性をもつ高校，市民や地域が求める力を生徒に身に付けさせる高校でなければなりません。とくに都道府県と異なり，市は高校の設置義務者ではありませんから，市民に要らないと判断されれば市立高校は存続できません。

それから，多様な背景を持って入学してくる生徒に対しての責任。一つ目の責任とも関連しますが，複数の学校があればそれぞれに特徴があります。学力が高い子が入学する進学校もあれば，さまざまな家庭の事情を抱えた生徒や，学力的な課題の多い生徒が多く在籍する学校もある。教員一人ひとり得手不得手や力を発揮しやすいフィールドはあるでしょうが，基本的には公立の教員は，高度な内容にも対応できる教科指導力から，課題を抱えた生徒に寄り添う精神的なタフさまで，さまざまな資質能力が求められます。

【高校教師に必要な資質能力】

教育基本法第９条には「法律に定める学校の教員は，自己の崇高な使命を深く自覚し，絶えず研究と修養に励み，その職責の遂行に努めなければならない」と記載されています。「崇高な使命」とありますが，採用されたことをもって，「自分は崇高な使命の職にある」という自己陶酔や正当化が出発点になってしまうのは非常に危険です。いわば「崇高な使命を担う者であらねばならない」という未完成形で捉え，常に自分の責任，行動，判断が適切なものであるか自己に問い続けなければなりません。だからこそ，後半に「絶えず～励み，～努めなければならない」と進行形で努力の必要性が明示されているのでしょう。

また，中教審の平成 24 年「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議のまとめ）」の「これからの教員に求められる資質能力」をみると，グローバル化，情報化，思考力・判断力・表現力等の育成，課題探究型の学習や協働的学びをデザインできる指導力など，時代を反映したキーワードがいろいろと並んでいます。ですが，筆頭に掲げられているのは「教職に対する責任感，探究力，教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力（使命感や責任感，教育的愛情）」であり，やはり教師はまず継続的なよき学び手であること，教育的愛情があることなどが不可欠となります。

【生徒との関係】

ここで私の経験から語れることがあるとすれば，まず第一に「生徒は最良の先生」と

いうことです。特に若いうちは，生徒たちが，自分たちはどう教えてほしいかを「先生あかん」「こうしてくれ」「こうやると楽しい」と，文字通り直接的に教えてくれます。ノン・バーバルな方法でもいろいろ示唆してくれます。授業中そっぽを向く，内職をする，ため息をつく，無視する，寝る，などなど。授業アンケートでぼろくそに書かれたりといった，胸をナイフでグサグサ刺されるような経験ももちろんあります。私は引きずるたちなので，毎度かなり長く落ち込みました。しかし，それもこれも，「こうではないのだ」という生徒からのメッセージであり，自分自身の改善のヒントです。

逆もありますよ。カチカチに硬くて，あれこれ間違いもある，拙い授業しかできない初任者の頃に，何がいいのかわかりませんが，なぜか慕ってくれて頻繁に質問に来る生徒がいます。安心してください，そういう生徒は必ず現れます。私は国語科ですが，国文学科出身でないこともあり，とくに古典が苦手で，最初の１年はずいぶん苦労しました。うまく説明できず，生徒が一斉にサーっと引いて，教室が異様な空気になってしまった経験もあります。そんな中，質問も補習もアンタに頼むわ，というような生徒が数人いるわけです。とくに最初の数年は，そんな生徒たちに本当に育ててもらいました。今の自分があるのは，あの頃の物好きな生徒たちのおかげで，彼らへの感謝を忘れるわけにはいきません。

また，同じことをしても，相手の生徒が変われば，あるいは年度によって生徒集団が変われば，反応も変わります。すごく感激してくれた生徒がいたのに，同じスタンスで接して「生理的に無理！」ぐらいの勢いで嫌われてしまうこともありました。生徒たちは，人間は一人一人全く違うという当たり前のことを，文字通り身をもって教えてくれます。

生徒は，最も公平で，辛辣で，情け容赦ない評価者です。先輩の先生に「お前のやり方はだめだ」と言われたとしましょう。それも謙虚に聞かないといけませんが，案外自分の中で言い訳がつきます。「でも生徒は自分のほうに寄って来るし，わかりやすいといってくれてるよ」なんてケースもあるかもしれません。しかし，生徒から，言葉やノン・バーバルな態度によるダメ出しがあったら，それは一番謙虚に受け止めないといけない。生徒が示してくれる反応で，自分が間違いを犯したことにいくらでも気づけるのです。それは軌道修正のチャンスです。

「生徒のレベルが低い」「中学で基礎ができてない」「本人の問題」「家庭のしつけ」「人間性が云々」。生徒のせいにしようとすれば，いくらでも見つけられます。場合によっては，第三者に判断してもらっても，その通りなのかもしれません。それでも私は，人気漫画の言葉を借りて，「生徒のせいにしたらそこで試合終了」と皆さんにいいたい。ひどい人間としか思えない生徒に出会うかもしれません。それでも，相手に非があるかどうかに関係なく，最後まで生徒のせいにしない。物事がうまくいかないときに生徒のせいにした時点で，自分の教育活動の

改善のチャンスを失います。どこまでも自分の直せるところを探し続ける。それも教育的愛情だと思います。誤解のないようにいっておきますが，妥協するとか生徒にへつらうということではありませんよ。生徒とは真っ向からとことんぶつかって勝負しながら，その裏で常にこちらの固定観念やアプローチも見直し続けるのです。

【組織で働く人間】

「それはしなければいけないのか」「しなくてもいいのでは」といういい方をする人がいます。「しなければいけないか，しなくてもいいか」という基準で物事を捉えると，教員をしばるものなんて法律と学習指導要領ぐらいしかありません。だから,「新しいことに手を出そう」「よりよい学校に改革しよう」「こういう取組をやってみよう」というときに，この基準で捉えると，およそどんな取組も全部「しなくてもいい」といえてしまう。この視点に立つ限り，教育活動はどこまでも貧しくなっていくことができます。

だから私は,「するほうがいいか，しないほうがいいか」という基準で物事を考えるべきだと思います。何かを変えようとすれば，当然失われるものも出てきます。何かを選ぶことは何かを捨てることです。また，教員負担が増えるとしたら，ワークライフバランスの問題も出てくるでしょう。その取組が生み出すメリットは，変えることに伴うデメリットより大きいのか。する場合としない場合，メリットとデメリットを比べて，総体としてどちらの方がいいのか。このように考えないと，まともな議論にはならないと思います。

【教師として大事だと思うこと】

私が教師として大事であると思っていることを話します。

１．覚悟と責任感（教育的愛情）
２．高い理想（各論において）
３．可塑性（将来の予測が困難な時代）

各論における理想について少し話しましょう。「卒業して何年も経ってから, あの時先生のいったことがわかったと思ってもらえる先生になりたい」といった夢のような理想だけでは，余り意味がないと私は考えています。「自分の教科におけるいい授業とは何なのか」「いい担任とはどういう担任なのか」「三者懇談の接し方はどうするのがいいか」などなど，具体的な各論において，それぞれ高い理想をもってください。徹底して理想を具体的に思い描くように心がけ，それを常に更新していけば，ロールモデルとなるような先生に恵まれない環境でも，あるいは「自分はわりとできているほうだな」と感じがちな中堅教員にさしかかる時期でも，歩みを止めずに進化の方法を探っていけます。

３点挙げてはみたものの，教科の専門性の強い高校では, 結局のところ「なぜその教科で教師を目指すのか」という今のあなたの情熱, これがすごく大切だと思います。あなたはその教科をどう咀嚼するのか？　あなたというフィルターはその教科をどう通すのか？　あなたはその教科という素材でどんな物を作るのか？　生徒はそれを待っています。

もちろん，勤務校の自分の教科ではどのような目標を掲げ，どのような力を育てるのか, そうしたことを担当者同士で共有し，だれが授業しても等しく保障することは必要です。その程度のことを揃えたぐらいで，どの先生も同じ授業になってしまうのであれば機械が行えばいいですが，教師の仕事はそんな無機的なものではないでしょう。それでもなお残る先生ごとの違い，そこに

人間でないとできない職業である所以があると信じたい。

経験を重ねると，仕事の原動力の排気量は落ちませんが，情熱がだんだん責任感に変質していくのを感じます。熱い意欲よりも理詰めの義務といった動機で仕事をする割合が増えている気がします。今日，皆さんを前にして，自分が皆さんの頃にもっていた情熱を思い出しました。逆にいうと，働きつつ，経験年数や組織の中の立場に応じて強めていってほしいのが責任感です。情熱を忘れてはいけませんが，いつまでも情熱だけではだめです。

ご清聴ありがとうございました。皆さんとともに働く日を楽しみにしています。

【塾生レポート】 受講して学んだこと

校種や私立と公立の違い等分かっていても，その違いをふまえて適切な指導をするというところまでは意識できていなかった。特に公立は，その市の全高等学校，ひいては市民に対しても責任を負う存在となる。公務員であるという自覚が必要だ。先生が，自分の見解を述べる前に指導要領等の記述に立ち返り確認されていたことも印象的だった。現場で働くことになっても基本を忘れず大切にした上で自分のオリジナリティを出していきたい。

また，教師の役割や仕事内容も校種で違う特徴があることも分かった。中学と高校をつなぐための取組が現状では薄いということを聞き，今後はここも重視していく時代になったと思う。そして，高校を卒業した後のことも考え，教育をもっと強化させるべきだとも思っている。自分がそうであったように，大学に合格することがゴールになってはいないか。キャリア教育，進路指導の充実が重要だ。制度の改革はすぐにはできないが，教師一人一人が生徒の「将来」のことを真剣に考え進路指導を行うことはすぐにできると思う。

自分が教師になったら「今」だけでなく生徒のこれからも見越した指導ができるようにがんばりたい。

京都市教育学講座８

「もとめられる養護教諭像」

体育健康教育室指導主事　長光　裕子

【はじめに】

養護教諭が「ナース」ではなく「スクールカウンセラー」でもなく養護教諭であることの専門性は何でしょうか。私は，次の３つの言葉で表せると思います。それは，「守る」「教える」「育てる」ということです。例えば，けがをした子どもが保健室に来た場合，まずは，手当をします（守る）。手当だけをして帰らせるのではなく，その子どもから“なぜけがをしたのか”を聞きだし，“これからどうしたらいいのか”を教えます。その後，次にけがをした時に“どのようなことができるか”考えさせることで，子どもを育てます。これらを同時に行うことが，ナースではなく，スクールカウンセラーでもない養護教諭の専門性です。

養護教諭の仕事の対象は，もちろん子どもですが，教職員との連携なしには子どもは育ちません。原則，校内に一人しかいない養護教諭だけが頑張っても微力です。保護者との関わりも大きいです。特に子どもの健康課題は保護者の協力がなくては進めていくことはできません。当然，子どもと保護者は地域に暮らしていますので，地域の方の願いを知り地域の方と歩むことも求められます。さらに，医療機関など関係機関とも連携します。そこで養護教諭は，コミュニケーション能力が特に求められます。相手の立場を知り，相手の立場に立ち，それでも必要なことは伝える力が必要です。

児童生徒を取り巻く健康課題が時代とともに変化し，近年は増えてきています。例えば，現在は各校に重篤なアレルギー症状を起こす子どもがいることを前提としなければならない状況です。給食後の昼休み後，子どもの顔の発赤や息苦しさを訴えて倒れた場合，アレルギーの既往の有無に関わらず運動誘発性のアナフィラキシーショックと判断してすぐに救急車を呼べるかどうか。養護教諭は専門知識を基に瞬時に判断しなければなりません。

【救急処置】

救急処置ができない養護教諭を学校は求めていません。子どもの生命を守り，心身の安全を図るため，的確な見極め・判断・対応が必要です。保健室に来た子どもの痛がっている箇所だけを見ていても駄目です。全身を見ます。例えば頭を強く打って泣いていて，自分で一切状況を説明できないようなこともあります。適切な判断ができるように様々なことを想像しながら子どもや教職員に確認します。冷やすだけでいいのか，救急車を呼ぶのか，休養させなが

ら様子を見るのか。信頼される養護教諭になるためには，適切な救急処置ができることが必須の条件です。救急処置ができない養護教諭は教職員にも地域の方にも保護者の方にも一切信頼されません。

救急体制の確立も必要です。保健室以外でも子どもはけがをし，倒れます。ほとんどの場合の第一発見者は養護教諭ではありません。その時にどのような対応を取るべきか，事前に研修することなく救急処置はできません。子どもが遊具から落下して気を失っている場合は，頸椎損傷の恐れがあるため，抱いて保健室に連れて行くのではなく，その場で保持することになります。また，子どもがアナフィラキシーショックを起こして倒れた場合，抱き抱えて頭を高くすると脳の血流が下に降りてショック症状が進み，生命に関わってきます。第一発見者となる教職員こそ救急処置をしっかり知ってもらわないといけません。養護教諭の採用１年目であっても校内研修を企画・運営できる力を備えてください。

【健康観察・健康相談】

養護教諭は子どもの健康観察に中心的な役割を果たします。担任や教科の先生が教室で子どもの健康観察をするだけではなく，学校生活全般を通じて全教職員で子どもたちの様子を見ます。

朝は元気でも途中で熱が出る子もいます。体調が悪いことに気づくことができずに放課後の部活動で倒れて救急搬送ということもあります。高熱がでていても子どもは自分でしんどいとは言わず，もうろうとしながらも授業を受けていることがあります。その子どもがインフルエンザであれば，教室でずっと一緒に過ごすことで，他の子どもへインフルエンザを感染させてしまうことになります。養護教諭は，常時子どもの身近にいて，子どもの命を守っている教職員に健康観察の方法を伝えなければなりません。

また，学校は集団生活の場であるので，感染症は瞬く間に広がります。誰一人休みはおらず，ただ「給食のおかわりが少ないなぁ」と思っていたら，次の日にクラスの半数がおう吐･下痢で休むこともあります。朝，その連絡の電話がどんどんかかってきます。症状のある子どもも登校してきます。その時，養護教諭としてどのような指示を出しますか。養護教諭の仕事は，予定通りではなく，突然に起こることに対応していく仕事でもあるのです。

健康相談も養護教諭の主な職務です。子どもが心身の健康問題を抱えて，保健室に来ます。養護教諭は，教職員・関係機関・保護者と連携します。長期間に関わるケースでは，子どもの短期目標・長期目標を含めた支援方針，支援方法の計画を立てることになります。

【保健教育】

保健管理や健康相談だけではなく，養護教諭も指導案を書き，授業を実践できる授業力を付けなければなりません。保健教育も養護教諭の大切な職務です。保健学習は知識理解が中心となり，保健指導は自分の生活で実践ができることを育てることが目

的になります。

養護教諭は，保健指導で何をしていて，保健学習は何を学ぶのかを知っているので，全体を見渡して計画できます。また，小学校１年生から６年生，中学校１年生から３年生の長いスパンで子どもを育てることができるのです。

【最後に】

養護教諭の仕事はハードです。いろいろと養護教諭に求められる能力を言いましたが，体力，気力は欠かせません。野外活動では，救護担当になりますが，子どもと一緒に登山もします。疲れた子どもを励ましながら登ることもあります。養護教諭の予定や体調に関係なく，子どもは手当てや安らぎを求めて保健室に来ます。自分がどれだけ辛くても笑顔で対応します。教職員のすべてが同じ意見ではありません。異なった意見を持つ先生もいます。相手の立場に立って意見を聞き，賛同すべきところ，教えてくださっていることは受け入れながら，自分が伝えたいことは伝えます。

ほとんどの場合，養護教諭は学校に一人です。そして，仲間である教職員に相談しながら，一緒に子どもを育てます。自分のクラスの子どもはいませんが，学校中の子どもが自分の子どもになります。子どもにとても悩まされることもあります。でもそんな子どもが養護教諭を癒してくれます。子どもの命と健康を守る養護教諭の仕事に情熱を持てる方に，是非，養護教諭を目指していただきたいと思います。

【塾生レポート】　受講して学んだこと

講義を通して，養護教諭に求められることは多くあることが分かった。その中でも救急処置は養護教諭に欠かせない能力であると改めて実感した。講義を受ける前までは，“優しい養護教諭”や“子どもの心に寄り添えるような養護教諭”になりたいと思っていたが，それだけではだめだと考えを改めることができた。保健室に来る子どもたちがどのような症状なのか，どのような処置が適切なのかしっかり判断することが重要だ。

判断するためには，日ごろから勉強し努力し続けることが大切なのだと感じている。様々なことに興味・関心をもち，知識と実践力を兼ね備えた教員になりたい。また，長光主事の言葉に「養護教諭は一人職だけど独りぼっちではない」というものがあった。つまり，養護教諭は他の教員と連携を取り協力していくことが必要だということも分かった。そのためには自分から積極的にコミュニケーションをとることが肝心なので，このことも大事にしたいと思う。

分散会後のグループアドバイザーの打合

京都市教育学講座８（総合支援学校専門講座）

「総合支援学校における教師の実践」

総合育成支援課指導主事　亀谷　正樹

【子どもはできる存在】

総合支援学校教員が障害のある子どもに教育をしていく中で一番大切なことは「子どもはできる存在」ということです。これを失ったら我々は教育ができません。障害のある子どもはできないことがたくさんあります。字を書くことができない，立つことができないなど，できないところに着目して「できないからできるようになるまで頑張れ」ではいけません。障害を起因とする様々な困難を克服していかないといけません。「このように支援すればこんなことができる」と子どものその姿を前向きに捉えます。「これはできないからやめておこう」ではなく，「何か支援をすれば，何か状況を作ればこんなことができるようになる」と子どもを捉え，子どものできること，わかること，子ども自身がやりたいと願っていることに着目します。子どもが「できた。やったー」と達成感や成就感を持てるように子どもたちを伸ばしていくのが今の総合支援学校です。

【包括支援プラン】

子どもの障害は様々です。教育的ニーズが一人一人違います。何のために何を誰とどのように学ぶか，指導の根拠と道筋を示すことが必要になります。京都市では，「個別の指導計画」や「個別の教育支援計画」の機能を有する「個別の包括支援プラン」を作成してします。個別の包括支援プランをもとに個々のカリキュラムを編成し，学習を積み重ねます。

この個別の包括支援プランは，学校でまず作成し，保護者にも見ていただき，意見交換をします。指導後の評価は，保護者とともに確認します。保護者懇談会，ケース会議等の場を通して，十分な聞き取り，話し合いを行います。さらに，医療や福祉等の関係機関とも話し合いを行います。学校が胸を張って子どもを社会に送り出すためには，しっかりと連携を図り，子どもの教育プランや就労プランを考えていかなければなりません。

【総合支援学校での教育実践】

私が総合支援教育で最初に困ったことは，教科書がないことです。実際に授業を組み立てていく教科書は一切ありません。小学校や中学校であれば指導書に目標と手順が書かれていますが，それがありません。何年か経ち，「想像力」と「創造力」を働かせることに気づきました。イマジネーションと，それから創り上げる，クリエイショ

ンです。これが総合支援学校の教員に必要です。まず想像することです。今，子どもはいったい何を求めているのか。みなさんも快い時は表情がやわらかく，不快なときは険しい表情になると思います。そういうところを読み取りながら，この子どもは何を求めているのか考え，言葉をかけます。また，そろばん，鍵盤ハーモニカなどの教材教具は，子ども一人一人の障害の状況が異なるので，一人一人に合った別のものを制作しなくてはなりません。

困ったときに，一番助けてもらったのは，子どもです。子どもはいろいろな姿を見せてくれます。子どもが先生であり，教科書であることに気づきました。子どもの瞬き一つ，指先の細かい反応，快・不快の表情で教えてくれます。その様子を見て，心の声や叫びを感じ取り，共に授業を創ります。学習内容や教材が合わず，子どもが不機嫌になり，そのまま授業が終わった時は「申し訳ない」と反省し，次を考え，そして想像します。これは確かに負担です。しかしながら，子どもの思いと教師の思いが一致した時の喜びは，言い表せないほどの感動です。子どもは笑顔で家に帰っていきます。教員もスクールバスを見送りながらガッツポーズをします。

子どもは一人一人違います。自閉症スペクトラム，四肢体幹機能障害などの病名・障害名がついていますが，同じ子どもは絶対にいません。「去年はこの教材を使ったので今年も使おう」では子どもにはまず合わないので，子どもは不快になります。子どもに応じて常にマイナーチェンジをしないといけません。そういうことを日々繰り返します。教科書がない，何をしたらいいかわからないことから始まりました。寝たきりの子どももいます。このような子どもにどのように教育していくのでしょうか。「想像力」と「創造力」。そして，子どもたちから学びます。私は，毎日「想像」と「創造」を繰り返し実践しました。授業が終わって「ああ楽しかった」この声を聞いたとき，この笑顔を見たとき，私は「ハマって」しまいました。障害のある子どもたちの教育から離れられなくなりました。

【総合支援学校の教員に求められる力】

子どもの最終目的は「社会参加と自立」です。小学部の段階では，次に中学部，高等部に進みますが，高等部を卒業すると社会に出ることになります。子ども一人一人に応じた社会参加と自立に向けて，日々の授業を始めとする積み上げを大切にしていきます。それを支えるための総合支援学校の教員に求められるものは何でしょうか。

まずは，障害のある子どもへの的確な指導です。「的確」とあるのは，一人一人，個に応じた教育を進めていくということです。子どもの障害及び障害特性，家庭環境もしっかりと把握し，教育を進めなければなりません。教師として当然のことです。

コーディネーターとしての役割も必要です。学校内だけでは完結しません。子どもが社会に出るとき，または，子どもが放課後で過ごすときなど様々な場面で関係機関との連携が重要になってきます。教師は保護者とその関係機関との間に入り，調整し，橋渡しもしていきます。

それから，コンサルタントとしての役割も重要です。学校での取組を保護者に説明し，保護者からの子育てについての相談や質問にも適切に答えることが必要です。

単にその総合支援学校の教員であるということではなく，京都市の総合育成支援教育を担っていく姿勢が求められていると考えています。

【インクルーシブ教育システム】

「インクルーシブ教育システム」という言葉を聞いたことがありますか。インクルーシブ教育システムとは，障害のある者と障害のない者が可能な限り共に学ぶ仕組みのことです。これは，平成26年1月に日本が批准した「障害者の権利に関する条約」の第24条に記されており，そのシステムの構築に向けて，障害のある者が一般的な教育制度から排除されないこと，自己の生活する地域において初等中等教育の機会が与えられていること，個人に必要な「合理的配慮」が提供されていること等が必要とされています。

一人一人が適切に学べる教育を提供していかなければなりません。そして，小・中学校における通常の学級，通級による指導，育成学級，総合支援学校で，それぞれ子どもが適切な教育の場で学んでいけることが基本になります。

これからは，「障害のある子どもだから総合支援学校や育成学級で学ぶ」ということは絶対に通用しません。できるだけ障害のある子もない子も同じ場で共に学ぶことを考えていかなければなりません。保護者とも十分に相談をして，合意の下で進めていくことになります。ですので，小学校教員，中学校教員だから総合育成支援教育のことはわかりません，というのは通用しなくなります。

「合理的配慮」も大事なキーワードです。是非，自ら調べて勉強してください。合わせて平成28年4月から施行される「障害者差別解消法」についてもしっかりと勉強して，教員を目指していただきたいと思います。

【塾生レポート】　受講して学んだこと

全体会では「子どものできる可能性を大切にする」ことの重要性を学んだ。私自身が介護等体験で特別支援学校へ通った時，その生徒の行動の手助けをするために，手取り足取り様々な補助として，帰りの用意全般や予定帳書きなどやったことを思い出した。

私としては，子どもたちの助けとなるよう良かれと思ってやったことであったが，もしかしたら子どもの「できる」を奪ってしまっていたのかもしれないと感じた。たとえ，手先が不自由であったとしても，全てを教師が手伝ってしまうのではなく，その子一人一人ができることはたとえ時間がかかっても本人にさせよう，またできることが増えるよう挑戦させてみようと考えることが大切だと感じた。

また，この時，保護者の意見や思いも大切にしたいと思う。そしてできることを増やすことによって将来を見据えた生きる力になるのではないかと考える。目の前にいる子どもたちが教師の支援の手が届かない社会へ出たとき，どのように生きていってほしいか，それを常日頃から考えて指導計画を立てていきたいと思う。

京都市教育学講座８（栄養教諭専門講座）

「もとめられる栄養教諭像」

体育健康教育室指導主事　西川　眞理子

【なぜ，学校で食育が必要か】

「筍の旬はいつですか」

子どもたちは，一年中何でも売っているのでわかりません。お箸は正しく持てているかというと，子どもたちだけではなく，大人でもできていない方がいます。先生方は毎日，子どもたちと食事をします。子どもたちは，みなさんが食事する様子を見ています。社会人としては，食事を大切に，きれいにいただくこともマナーの一つだと思いますし，これも食育につながることになるのです。

また,「朝ご飯を食べないといけない」ということは小学１年生の子どもでもわかっています。しかし，食べない（食べられない）子どもがいます。理由を聞くと「朝に食欲がない」「時間がない」「朝ご飯が用意されていなかったから」などです。いろいろな事情があって朝ご飯を用意できない家庭もたくさんあります。これが現状です。こういったことに対しても食育の面からも対応することが求められています。

食育は知育・徳育・体育の基盤となるものです。しっかり食べて体が健康でなければ考えることもできません。食は脳・体・心の発達のすべてにつながっています。

【生きた教材としての学校給食】

義務教育の中での食育は「食に関する指導」と言われています。食に関する指導は学校教育全体を通じて行わなければなりません。その中で土台になっているのは日々の給食そのものであり，給食時間の指導です。食育といえば栄養教諭が行うものと思われがちですが，給食は他の先生も毎日同じように食べています。決して特別なものではなく子どもたちと一緒に食べる体験の中でいろいろなアプローチが可能になるのです。また，各教科・領域でも食と関係した指導を行う際に学校給食との連携を図ることにより，子どもの興味・関心を一層引き出すことができます。

給食に関するアンケートにおいて,「子どもたちが学校給食を好きな理由」を聞きました。一番は「みんなと一緒に食べられるから」です。給食では，同じものを食べながら，ひと時を共有できます。もしかしたら，ある子どもにとっては，給食を食べている時だけが誰かと食事をしている時なのかもしれません。給食の時間を有効に使っていただきたいです。

給食の時間に，子どもは食べたことに関する感想がいろいろと異なっていることに気づきます。１年生でピーマンが嫌いな子

どもはたくさんいます。「チンジャオロースやったー！」と言っているのを聞いて,「もしかしたらおいしいのかもしれない」と一口食べてみて，その時においしさがわかるということもあります。このようなことが起こりうる時間であり，実際に起こっています。６年生にもなれば好き嫌いがほとんどなくなります。嫌いでも全部食べられるようになっています。食べられたということは自分にとって誇れることであり自己肯定感が高まります。自分を大事にする気持ちにもつながります。つまり，心の成長にもなるのです。学校給食をどのように教材として活用していくのか，また，学校の中で全ての教職員の方にどのようにアプローチして食育を進めていくのか，それをコーディネイトすることが栄養教諭の役割になります。

【栄養教諭に求められるもの】

栄養教諭に求められるものは３つあります。

一つ目は給食管理です。栄養教諭は，献立を作成します。その際のポイントは２つあります。一つ目は，子どもたちに必要な栄養素がしっかり摂れることです。二つ目は，子どもたちが安心して食べることができるように衛生管理の徹底を図ることです。絶対に食中毒を出してはいけません。

給食調理員の人数や施設・設備も考えながら，最大限できることを考えて献立作成をします。

二つ目は，食に関する指導です。食物に不自由のない時代です。なんでも食べられるしいつでも食べられます。その中で食に関する指導の大きな目標は,「食に関する知識と食を選択する力を習得し，健全な食生活を実践することができる力」を身に付けさせること,「食を楽しむ心」を育てることです。食はプライベートなものです。家庭によって様々な食卓の風景があります。食の体験は子どもによって大きく異なっていることをしっかりと踏まえて，給食の時間を活用しながら授業を組み立てることが大事です。

給食時間の子どもたちの様子を見て，話をしたりすることから，食の実態を探り出すことができます。また，子どもたちに食生活についてのアンケートを取ることも有効です。実態をしっかりと把握し，探って仮説を立てて授業に臨んでください。これは食に関する授業だけではありません。他の授業も同じではないでしょうか。

各教科・領域においても食に関する指導の題材になることはたくさんあります。教科担当と連携することにより，食に関する指導の効果を高めることができます。栄養教諭だけではなく学校全体で食育を考えることが，すべて子どもたちの食への意欲・健康・生活改善になり，ひいては家庭の食生活の改善にもつながっていきます。

三つ目は個別指導です。子どもたちは偏食や肥満・痩身・アレルギーなどたくさんの課題を抱えています。個別指導は，生徒指導や人権指導と大きくかかわってきます。大事なことは，その子どもを正しく理解することです。そのために，情報を収集し，分析します。子どもの心や体の成長を

妨げているもの，躓いているものは何か，それをどのようにすれば取り除くことができるのかを考えます。教職員からもアドバイスをもらいます。原因と理由を十分に考え，子どもに接していくことが個別指導の上で大切です。

特に食物アレルギーのある子どもへの対応において栄養教諭は非常に大事なキーパーソンです。一つのミスが子どもの命を奪ってしまうことになります。保護者の面談に立ち会い，医者からの診断書に当たる生活管理指導票を受け取り，アレルギーの状態を確認します。情報は，必ず教職員全体で共有し，アナフィラキシーの発症を避けるとともに，緊急時に適切な対応をとることができる体制を整えます。食物アレルギーのある子どもが安心して学校生活を送ることができるように，栄養教諭としてなすべきことをしなければなりません。

【最後に】

みなさんご存じですか。平成 25 年 12 月に「和食」がユネスコの世界無形文化遺産に登録されました。それを受け，京都市の小学校給食でも和食の良さを伝えていく取組をしています。月に１回程度，和食推進の日として,「和（なごみ）献立」を提供しています。この日の献立については，だし汁の旨味を味わうことのできる献立や，季節感のある伝統行事などにちなんだ献立，旬の食材や果物，和菓子など和食の特徴や良さをより感じられるように献立を工夫しています。学校給食は，食文化を伝える役割も担っているのです。

「食べる力は生きる力」です。このことを常に心にかけて，子どもたちに接していただけると嬉しいです。教育者として職種に関わらず，どのような食育ができるのか，そのために何をするべきか，何ができるのかについて，考えてみてください。

アドバイスを謙虚に受け止め，自分を磨き続けることができれば，素晴らしい教員になっていただけると思います。

【塾生レポート】　受講して学んだこと

本日の講座において,「栄養教諭」というテーマを通して様々なことを学ばせていただいた。特に印象に残っているのは「子どもたちの実態をつかむこと」と「子どもたちに考えさせる授業」の大切さである。前者については，私自身漠然と“子どもたちは和食苦手なんだろうな”や“あまり野菜を食べないのだろうな”といった思い込みがあり，そこから授業をつくろうとしていたのだが，それでは子どもたちに響かないことが分かった。子ども一人一人の声を聴き，その中で課題を発見し，授業をしていくからこそ，子どもたちが「食」を意識することにつながるのだと学んだ。後者については,「食」について学んでいる者として，子どもたちに多くのことを伝えたいと思っていたのだが，それでは本当の学びには成らないことを学んだ。「なぜこうなるのだろうか」と子どもたち自身に考えさせることが学びの原点であり，その中で気付かせることができるような授業をつくっていきたいと強く思った。

教育実践特別公開講座５

「教師をめざすあなたたちへ
～小中一貫校づくりを経験して伝えたいこと～」

京都市立開睛小・中学校校長　初田　幸隆

【講師からのメッセージ】

「夢・志・誇り」これが東山開睛館教育を貫くキーワードです。教職ほど夢をもてる仕事はありません。それは人を育てるという営みを通して，これからの地域を，そして社会を，国を，更には世界を築き上げるという，高い志が求められる仕事をしているからにほかなりません。皆様にご期待いたしますことは，そのような社会的意義のある仕事に携わるのだという誇りと共に，これからの人生を逞しく歩んでいくための資質や能力を育てられる先見性や具体的な教育技術を身に付けていただき，子どもたちにとって，正しく先を生きていく先生になっていただくことです。今回の私のお話が少しでも皆様のお役にたてますよう全力でお伝えいたします。

【はじめに】

皆さん「なぜ教師を目指されますか」と問われればどうお答えになるでしょう。よく「子どもが好きです」とお聞きします。おそらく教師としてこれはなくてはならないものだと思います。けれども子どもが好きなのであれば，例えば子ども服のデザイナーや販売員，保育士さんになってもいいのです。なぜ教師になりたいのかという問いの答えにはなりません。「子どもが好き」であることの他に何があるのか，そのあたりを今日は考える機会にしていただければと思います。

私は昭和 31 年の生まれで，昭和 55 年に教師になりました。１年間講師をした後，ある市立中学校に赴任しました。当時は校内暴力が社会問題になっていて，特に中学校で生徒が大きく荒れていました。赴任した中学校でもあらゆる問題行動が起こっていました。私は４年目から補導主任になり，たくさんのトラブルを乗り越えながら，やっと子どもたちが自分のことを認めるようになったと感じたのは５年目を過ぎたころだったでしょうか。ところが，時には私の指導に従うが，他の教師の指導に従わない子どももいるのです。自分の言うことを聞かせて満足している自分。そのことに気

づいたときに初めて，私の指導や考え方は間違っているのではないかと思いました。大切なことは，どの教師が指導をしても，その指導の内容に応え得る生徒を育てることだったのです。子どもの話すことに耳を傾け，話し込みをし，それでもなかなか指導が通じない。けれど根気よく粘り強く続ける。子どもの心を変えて行動の変容を図ることが教員の務めなのです。これが教師の役割だということに５年目で気づかされました。

【この国の今とすこし先】

さて，“この国の今とすこし先”について考えます。世界における日本のGDPは低下し，現在第３位になりました。また，生産年齢人口は，2060年には2010年の数字と比べ半減すると予想されています。生産は，生産年齢人口を増やすか一人一人の生産性を上げることでしか成長が見込めません。国レベルでの大きな教育課題は，この一人一人の生産性を上げるということにつながっています。我々はそのことを使命として自覚すべきではないでしょうか。

オックスフォード大のオズボーン氏が，未来のコンピューター化によって失われる仕事を予測しています。人工知能（AI）が実用化されることで，この10年で今ある仕事がたくさんなくなっていくと言われています。汎用的能力を持ったAIが普及すれば急速に我々の仕事は奪われていきます。こういう時代が間もなくやってくるのです。

先生はなぜ先生というのでしょうか。先に生まれたから先生ではなく，先生は先を生きるから先生なのではないでしょうか。我々の人生のずっと先を生きる子どもたちが，生涯幸せに豊かに暮らしていく力を育てなければならないのです。過去に必要であった力は，時代と共に変化しています。自分が教えていただいた内容や方法では，これからの授業は成り立たなくなっているのです。例えば，虫歯の治療で数十年前の医療機器で治療される歯医者さんに行きますか。最新の医療技術を駆使する歯医者さんに行くのではないでしょうか。教育も同じことなのです。

PISA調査の結果を見ると日本の子どもたちの学力は世界トップレベルです。しかし，子ども達の“自己肯定感”や“自己有用感”などの「自尊感情」が，他国と比べると圧倒的に低いという結果も出ています。これも教育の課題のひとつといえます。子どもたちが学んでいることと，生活はつながっているのか，将来の社会につながるという見通しが持てているのか，というキャリア教育の視点での見直しも必要でしょう。キャリア教育の概念は正しく学力向上をめざすベクトルと同じ方向を向いています。○○教育は数え切れないくらいありますが，めざす子どもの姿の実現に向けて一つのベクトル線上に乗せながら教育課程をマネジメントすることが大切になってくるのではないでしょうか。

【学校づくり】

ここから，私の学校づくりを振り返っていきたいと思います。

現在，私が勤務する東山開睛館は，２つの中学校と５つの小学校が統合されて一つになりました。それぞれの学校には長い歴史と伝統がありました。けれど，新しい学校を創るのですから，今までの考え方に縛られることなく，これからの社会と子どもたちの実態を見据え，教育目標となる目指す子どもの姿を３つで表現しました。

１つ目は「挑戦的に学ぶ姿」です。主体的という言葉をよく使うのですが，言葉に強さをもたせるために「挑戦的に」という

言葉を敢えて使いました。２つ目は「卑怯を許さない姿」。他人の卑怯も己の卑怯にも厳しくあってほしいとの思いがありました。やったらできるのにやろうとしないのも卑怯。見ているのに知らん振りするのも卑怯。そういう振る舞いを許さない人間であってほしい。そのように考えました。そして３つ目として「つながりを喜びとする姿」を設定しました。今，子どもたちは一人で遊ぶ場面が多いのです。子どもたちは群れなくなりました。公園でボールを蹴ったらしかられます。草野球をする広場がありません。今，そういう生活環境の中で子どもたちはややもすると分断されているのです。このつながりがつくれるのは学校ではないでしょうか。将来的に学校の機能として外せないのは集団活動です。我々は社会でつながりあって生きている生物です。だから，つながりを喜びとする姿を目指したいと考えたのです。

開校時のエピソードがあります。小学校の教室の前には図工の作品を並べたりしますが，中学校は壊されることを想定して美術の作品を廊下などに並べたりはしません。観葉植物を廊下に並べても，小学校の先生は「きれいですね。教室にも入れて欲しいです」と言われますが，中学校の先生は「あんなところに置いていたら子どもがひっくり返しますよ」と心配します。この理屈でいうと「こんなところにガラスがあったら割れるといけないからはずしましょう」と言っているのと同じです。子どもたちが何か問題を起こすたびに粘り強く指導していくことが大切であり，失敗を通して大人になっていくのではないでしょうか。私は「小学校か中学校のどちらに合わせるのか」ではなくて，社会の規範に照らして考えていきたいと教職員に働きかけました。

今学校では知識や技能を学ぶだけでなく，学んだ知識や技能を使って何ができるのかという活用する力を育てなければなりません。そしてさらに課題を見つけその課題解決に向けて学びのプロセスを自ら考え，習得や活用の学習で身に付けた能力を発揮して解決を図る力を育てようとしています。

習得，活用，探究は相互に関連していて，探究の過程で自ら知識や技能の習得に向かうこともあります。本校では，ねらいを明確にし，学びのプロセスを児童生徒と共に考え，そのプロセスに沿った授業展開をするように小中教員が共通の課題意識のもとで取り組んでいます。

これからの社会で求められる読解力の育成もこのプロセスの中で育てようとしています。東山開睛館では読解力を「課題設定力」「情報選択力」「情報活用力」「相互交流力」「自己活用力」とし，「課題設定→情報収集→選択→活用→相互交流→自己活用」というプロセスを各授業で作っていくことでこれらを育てようとしています。「思考」→「判断」→「行動（表現）」はこの過程でスパイラル状に繰り返されていくのです。このような学力こそが実社会で役に立つ力になると考えています。

このような学習を進めようとすると，情報をどのように取り扱うのかがとても大切になります。メディアリテラシー教育もすすめつつ，メディアセンター（学校図書館）の充実が重要になります。

開校するにあたり，人権教育についての考え方を提示しました。同和問題や在日韓国朝鮮人の問題，女性差別の問題，障害者差別の問題，ニューカマーの問題など，様々な個別の社会問題があります。そういう背景がある中で，子どもたちが表している態様は，虐待をはじめ，不登校，いじめ，問

題行動，集団不適応，低学力などの諸問題なのです。さらにその実態を生む要因を探ると，そこには学習障害や，ADHD，高機能自閉症，情緒障害など，いろいろな課題が見え隠れします。私たち教員はこれらの個別の課題に向き合い，それぞれの子どもたちに即して特別な手立てをしっかり打ちながら学力保障をめざす。このことが人権教育そのものではないのでしょうか。学力の保障は，負の連鎖を断ち切る切り札です。「目の前にいる子どもに力をつけて次の世代に負の遺産として引き継がせない」という決意，強い意志を持って臨める教師でありたいと思い続けてきました。

【まとめ】

最後に私が教員経験を通して身に付けた教育観をお話しします。

川は曲がりくねりながら海に注いでいきます。蛇行です。ともすれば人間は川をまっすぐに改修しようとします。両側に堤防を作って流れを直線に変えてしまえば，大雨が降ると溢れそうになります。子どもも同じです。大人の思いから目標に早く近づけようと急いで直線上を走らせようとすればトラブルを起こして当然ではないのでしょうか。曲がりくねりながらでいい，時には曲がり角で小さな氾濫を起こしながらやがては海に注いでいく。その成長を教師は長い時間をかけて付き合いながら見ていくことに喜びがあるのではないでしょうか。

認められることが学びの原動力です。私は中学生の時に習った「名月や　池をめぐりて　夜もすがら」という俳句の解釈で，松尾芭蕉が池をめぐって詠んでいるとは思えず，一点から眺める池の水面を名月がめぐっていると考えました。先生に自分の解釈を説明すると，はっとした顔をされて，「その解釈でもいいのだよ」と認めてくださいました。勉強が好きになるきっかけとは，このような些細な経験ではないかと思います。学びの原動力，肯定的な評価を大切にしていただきたいと思います。

塾での学びについて質問する塾生

「国や郷土に誇りなき者の学びは砂上に楼閣を建てんとするに似たり」ではないでしょうか。日本の子どもたちもこれから世界に出ていき，文化や宗教の違いを前提として，様々な人たちと折り合いをつけながら仕事をしていかなければなりません。そのことを考えた時にこの国の子どもたちの強みを最大限に伸ばしておきたいと考えるのは私だけでしょうか。その強みとは何か。和の国・和食・和服などの「和」です。私たちはもう一度足元を見直し，「和」のもつ良さを子どもたちにもしっかりと自覚をさせたいと願っています。

本日は，東山開睛館という小中一貫校づくりに取り組む中で考えたことや得たものを，これからの教育界を担う皆様にお話しさせていただく機会を頂き，誠にありがとうございました。皆様のこれからのご活躍をご祈念申し上げ，お話を閉じさせていただきます。

京都市教育学講座９

「授業づくりと評価」

学校指導課統括首席指導主事　海老瀬　隆博

【問い直す】

皆さん，無意識のうちに模倣してはいませんか。私たちは，子どもの頃から，多くの先生方に指導を受けて来ました。そして今，自分が指導する立場になって子どもたちとかかわる時，知らぬ間に，自分が受けた教育の方法を真似てしまってはいないでしょうか。

例えば，子どもを呼んで注意する時，その話し方や話す内容等，自分自身が受けた指導の様子とそっくりになっていることがあります。誰かの指導のあり方をモデルにすることは悪いことではないのですが，それだけになっていないかとふり返ってほしいのです。

これは，教師と児童・生徒の関係だけではなく，家庭における親と子どもの関係にもあてはまります。子どもをしつけ，育てる時に，自分が家庭で受けた教育のあり方が強く反映しています。私たちは，こうした事実のあることを自覚していることが大切なのではないでしょうか。

教育には，「変えてはならないこと」と「変えなければならないこと」の二つの側面があります。そこで，何を変え，何を変えてはいけないのかが，私たちに問われている訳です。子どもに対する温もりのあるかかわり，子どもの心に響く励まし，子どもに寄り添う姿勢等の大切さは，これはいつの時代も変わりません。教師にとって魂のように重要なことです。しかし，社会の状況が大きく変容する時，例えば，授業のあり方，指導の方法，学習環境の整え方等は，変えていかなければならないことです。変革のスピードが速いこの時代，例え数年前のことであっても，そのままでは具合が悪いこともあるでしょう。それを見極めることが必要なのだと思います。

【学力とは】

教師を目指す二人の学生が話をしています。花子さんは「子どもたちには勉強が出来ることより優しい思いやりの心を育てることが大切だわ。授業づくりよりも学級の仲間づくりが先よ」と言い，太郎さんは「教師の最も大切な仕事は，子どもたちに確かな学力をつけることだ。そのためには授業がしっかりできなければいけない」と言います。皆さんはどちらの考えに近いでしょうか。そして，なぜそのように思ったのでしょうか。

どちらかと言うと，花子さんの意見は聞こえがいいのです。この意見に対して「そうではない」とは少し言い難い。太郎さん

の意見に対しては「何を言っているのか。勉強より大事なものがある」という人が絶対います。そうではありませんか。

しかし,「授業づくりよりも学級の仲間づくり」と言う時の,「授業づくり」とは何でしょうか。また「仲間づくり」とは何でしょうか。そこは，とても曖昧だと思うのです。

教員免許状更新講習の講話を担当した時に，現職の先生方にも同じ質問をしてみました。すると，現職の先生もまた，花子さんの意見へ賛成する声が多かったのです。これはどうなのでしょうか。「優しさ」や「思いやりの心」が大切でないと言っているのではありません。そうではなくて，学校の先生が教える「勉強」はそれほど役に立たないものなのかと言いたいのです。「授業」や「勉強」の本当の意味が吟味されていないのではないでしょうか。それに,「優しい思いやりの心」はどのようにすれば育つのでしょう。教師の具体的な手だては何でしょうか。やはり曖昧な印象があることは否めません。

私もきっと，若い頃は，何となく花子さんの意見に賛成していたと思います。しかし今は,「授業づくり」や「確かな学力」という言葉が何を意味しているのか, そして, 私たちは何を最優先にして取り組むべきなのかを，皆さんと一緒にもっと考えなければいけないと強く思っています。

学力には,「見える学力」と「見えにくい学力」があります。知識・理解のように, 点数化しやすい学力があり，それは「見える学力」となります。しかし，学力については，見えている部分はほんの一部，いわば氷山の一角だとも言うことができます。例えば「思考・判断」や「関心・意欲・態度」はどうでしょうか。「見えにくい学力」ではありますが，学力の重要な部分を占めていますね。

このことは，大阪大学大学院の志水宏吉先生が提案されている「学力の樹」モデルを見て頂くと大変分かりやすいでしょう。学力を「葉」「幹」「根」に例えて論じておられます。「葉」は「知識・理解・技能」であり，「幹」は「思考・判断・表現」です。また「根」は「関心・意欲・態度」を表しています。「根」は地中にあって見えないけれども全体を支えています。豊かに育った「葉」や「根」は,「幹」を通して樹全体に水分や養分を送る訳ですが，このモデルを見れば，知識や理解が活用されることによって思考力・判断力・表現力が育つということが分かりやすく捉えられます。「葉」「幹」「根」が一体となって，はじめて生きた樹となるように，学力の三つの要素も，それが有機的に結びつき，はじめて統一体としての学力になります。三つの学力が一体となり，一つの生きた樹になります。一つでも欠けてはいけません。このバランスが大切なのです。

つまり，学力は，総合的な力だということができます。そのことがしっかり捉えられていないから,「勉強ができることよりも…」といった議論が生まれてくるのではないでしょうか。

【授業は教師の魂】

授業は教師の魂であると思っています。だから最初の問いで，私は太郎さんが言っていることは，ある意味核心をついていると思うのです。まだ若い頃に, ベテランの先生に，次のように言われました。「まず，学級の子どもたちを集団としてまとめていくことを考えるのは，担任として当然のことだろうけれど，町内の普通のおじさんだって，子どもへのかかわりが抜群に上手な人はいる。教師ならば，やはり授業で勝負しなければならない。授業ができなかったら，

この仕事は続けることはできない」と。

人の良さだけで教師ができますか。「不味くて店も汚いけれど，店主の人柄は良いから」という理由で，その飲食店に通いますか。「あの先生は，教室は常に散らかっていても平気だし，授業も下手だ。しかし人間的にはよい人だから」という理由で，子どもたちは学校に通うでしょうか。公立学校で，先生を選ぶことができないから，教師を続けられているのです。少し厳しく言いすぎたでしょうか。でも私たちはprofessionalなのです。

授業について真剣に考え，授業の質を高めていくことは，あらゆる教育活動の質を高めることに繋がります。一人一人の子どもたちを育てながら，あらゆる活動で主体的な学びの姿を見出すことができます。授業づくりに渾身の力を注ぐからこそ，「子どもをより丁寧にみとる」という意識が確かなものになります。そして，教師の授業力が向上していくことが，学校総体が発揮する力，学校力の向上につながるのだと思います。

【授業の型】

京都市教育委員会は『子どもたちの学力向上をめざして』（指導改善の手引き）という冊子を作っています。その中で，授業は，「授業スタイルをつくる」ことが重要であると記しています。まず，授業の入口と出口をはっきりとさせます。入口に「めあて」を置き，出口には，それに対応する「ふりかえり」を置きます。授業を構造的に捉える必要があります。まだ若い先生が「型にはまった授業は面白くない。もっと面白い授業をつくりたい」と話していると聞きました。授業の型を知らずして，どうして独創的な授業ができるのでしょうか。職人さんの仕事で考えてみてください。授業の型を守り，次にそれを破り，ついには離れて，自分の型を見出す。いわゆる「守破離」は，時間をかけ，実践を積み重ねて初めて可能なことです。私が大学で学んでいた頃に，ある講師が「教師とは実直なものです。そのためには誠実でないといけない。子どもへの評価は丁寧に見取ることから始まる」と話されていたことを今でも覚えています。丹念に積み重ねるように努力してこそ，自らの授業力，教師力を向上させることができるのではないでしょうか。

【最後に】

「評価すること」と「指導すること」は往復運動の関係です。「評価すること」は，ただ単に成績を付けることと思われがちです。そうではありません。成績を付けてみて，「この子の成績がこんなに悪くなったのは，自分の教え方が悪かったからではないか」と考えることができるでしょうか。通知表を渡され，子どもは教室の隅にそれを持って行って，薄く開けながら，そっと中を見ます。あの時の子どもの気持ち，それを受け取った時の親の願いをどう受け止めますか。教師は，自分の取組，授業の内容と方法，子どもへの指導がこれでよかったのかを考えるべきです。子どもへの評価は教師への評価でもあります。

評価するためには，子どもを丁寧に見取ることです。それは，子どもの事実を捉えることです。指導することは，教え方を工夫することでもあるし，子どもの学び方を工夫することでもあります。教師は，評価の結果から，次の指導のための具体的な手だてを考えます。このような往復運動によって「評価すること」と「指導すること」が一体化します。評価は「子どもに点数をつけること」という狭い捉え方をしてはなりません。子どもを評価することは，教師の指導のあり方を問い直すことです。

教育の根幹にある「授業」を日々問い直していくことで，教育の全体が見えてくると思っています。これまで，昨日より今日，今日よりも明日と，少しでもよい教師になりたいと思いながら，この仕事を続けてきました。お互いに，どうぞ精進を重ね，「ホンモノの」先生をめざして励んで行きましょう。

【塾生レポート】　受講して学んだこと

１　全体会

最初にあった“花子さんと太郎さん”のどちらの意見に共感するかという問いで，私は“花子さん”の意見に共感しました。しかし，今日の講義を通して子どもに確かな学力を身に付けることで，思いやりや優しさも身に付くのではないかと感じました。学力の構造のお話では，見えにくい学力である「関心・意欲・態度」についての定義が印象に残りました。これらは，頷きながら先生の話を聞く態度や授業中に何回手を挙げたかといったことではなく，学んだことをどう生かしていくのかといった実践的態度のことだと分かりました。授業中に何回手を挙げたか数える先生もいらっしゃるという例が挙がりましたが，私もその光景を見たことがありました。このように授業中の子どもの様子だけを見るのではなく，日常生活の中で子ども一人一人を見ていくことが大切だと感じました。またこのことは道徳教育ともつながる部分があるのではないかと思いました。

２　分散会

授業と評価についての話し合いが中心になりました。私は今まで個性的で面白い授業をしたいと考えていましたが，それは正しい授業の型を知った上でできることなのだと気付かされました。授業の型を大切にしつつ，自分のオリジナリティも加えていく（守破離）方法は，これから考え続けなければいけないことだと思いました。また自分が授業を行うときには，授業公開・授業観察・授業分析のサイクルも大切にしながら実践していきたいです。自分の授業を公開することには少し抵抗がありますが，授業力を向上させ，子どもの意識を変えるためにも取り入れていきたい方法だと思いました。評価は自分の在り方を問い直すものだというお話もありましたが，子どもを評価することは自分自身の授業を評価することにもなると思いました。

３　まとめ

最後のお話にあった「まる」の詩は，自分の経験にも当てはまる部分があって，懐かしい気持ちになりました。授業と評価の関わりを常に考えながら，自分の授業力も向上させていきたいと思います。授業を行った際には反省・振り返りを大切に改善に努めようと感じました。

コメント

講義で学力の構造の話がありました。「知識・理解」「技能」は習得した学力，また「思考・判断・表現」は活用のための学力と考えれば，「関心・意欲・態度」は探究する学力に相当し「学んだことを使おうとしているかどうか」を観る実践的態度だと思います。子どもたちのそれぞれの学力の習得状況を評価し，授業改善に取組む姿勢こそ，学び続ける教師ではないでしょうか。

教育実践特別公開講座６

「言語活動の充実に向けて」

学校指導課長　島本　由紀

【講師からのメッセージ】

これからの教育は主体的・協働的な学びであるアクティブ・ラーニングの重要性が強調されていますが，その基盤となるのが現行の学習指導要領でも提起されている「言語活動の充実」です。「言語活動」とは一義的には「話すこと・聞くこと・書くこと・読むこと」の総称ですが，これらの活動に終始するのではなく，言語活動を通して，学習のステップである「習得・活用・探究」の各段階を深めていくことが目的です。これからの社会を見据えて，なぜ「言語活動の充実」が大切なのか，一緒に考えていきましょう。

【はじめに】

まず，私が考えた“川柳”を紹介します。

～読めぬ名が名簿に並ぶ一年生～

使える漢字は決められているものの，読み方には一切制限が無いためにこんな事が起こります。

～満点をやばいヤバイと喜ぶ子～

子ども達の会話の中に「ウザイ」「キモイ」「カワイイ」「ヤバイ」がよく出てきます。十代の子で「ヤバイ」を「とても素晴らしい」という意味で使っている子は，九割にもなるそうです。また,「微妙」のことを「良いか悪いか判断できない」という意味に使っている人は，三十代までの人で同じく九割に達するそうです。

スマホ一つで世界中のことがわかります。しかし，世の中がどんどん進むことによってリスクも広がっています。たとえば, カードの情報が消えたり盗まれたりと, カードがなかった時代には必要のなかった心配事が増えています。そして生き方も含めて世の中がどんどん流動化しています。従来の常識やパラダイムでは当てはまらない社会が生まれているのです。外国の先生の研究ですが，今の小学生の３人に２人は今までになかった仕事に就くと言われており，ここが私は大きなポイントだと思います。

私が子どもの時に流行った漫画鉄腕アトムは，人型ロボットでいろんなことをします。当時は「スゴイ, でもそんな馬鹿な」と思っていましたが，今，確実にロボットや人工知能が活躍する社会になっており，そのために労働の質が変わってきています。その結果，今までと違う社会が作られようとしています。また，人口動態の変化のグラフを見られたことがあると思いますが, 日本は 65 歳以上の人口が増え, 働き手や子どもたちの人口がしぼんでいます。学校の

先生になり30年間勤めようと思ったら，30年後の人口動態が示す社会を目指して教育をしなければなりません。

【求められる資質・能力】

これまでの教育は「知ること」「わかること」が最終目的でした。しかし，これからの教育は，「知ったこと，わかったことをどう自分で自分のものに変えて発信していくか」が問われます。つまりこれらの力でどう生きていくかということが問われてきます。文部科学省の「教育課程企画特別部会」で，これからの教育について論点整理が行われています。この中で強調されているのは，これから求められる資質・能力は「問題を設定する力」「新たな価値を創造する力」「対人関係能力」などです。要は，自分で考え判断し，広く行動できる人間を育てなければいけないと整理されています。

1970年当時，日本の経済成長は一年間に５％パイが大きくなっていました。だから親は「しっかり勉強していい会社に…」というわけです。今は１％も成長していません。子どもたちの方が，「一生懸命勉強してこの先どうなるの？」という疑問をもっています。だから，なんのために学んでいるのかを子どもに気づかせないといけません。“人”が重要な資源であるこの国に，「キショイ」「カワイイ」「ヤバイ」「ムカツク」「死ね」ばかり言っていて生きていけるかを子どもに問いかけなければいけません。経済的な豊かさから，文化の豊かな成熟した社会になっていくわけですから，単純な単語だけで語れる社会ではないと自覚させることが必要になってきたわけです。

平成20年の中教審答申に「これからの学校は進学や就職について子どもたちの希望を成就させるだけではその責任を果たしたことにならない」とあります。「○○高校受かった」「○○大学受かった」それだけが学校の責務ではありません。その人の将来まで保障するぐらいの力をつけてやらなければなりません。だから，学校の先生は「しっかり勉強していい学校行って…」「高校行けないぞ」ではなく，「どんな人生歩みたいのか」「そのためにいろんな勉強が必要なんだ」と子どもたちに教えなければなりません。「いい成績→いい学校→いい会社→いい人生」でなく，「いい成績→行きたい学校→つきたい仕事→豊かな人生」こういう構造の変化を意識した学校の先生になっていただきたいのです。これは，キャリア教育そのものですし，言語活動を考える時，このようなキャリア教育の視点が大変重要になります。

【言語活動の充実】

国の教育の施策では，言語活動の充実が強調されています。これは，子ども達の言語活動が現状では課題があるからです。「話す」「聞く」「書く」「読む」これらは全て言語活動ですが，教育のみならず生きていく基本的なツールです。「ヤバイ」「キショイ」だけでは言語活動の充実は図れません。では，言語活動の充実とは何かと言うと，「読む」ことでは，ただ読むだけではなく，「読

んだことの内容が理解できていること」がポイントになります。「書く」と言ったら，「書くことによってしっかりと自分の思いが表現できること」が大切なのです。「聞く」ことや「話す」ことも同じです。「読む」と「聞く」はインプットで,「書く」と「話す」はアウトプットです。インプットとアウトプットのバランスと組み合わせが大事です。

そのために授業を改善していかなければなりません。一方的に先生がしゃべり，詰め込むのではなく，子どもたちが活動する場面，考える場面を意図的に入れているかどうかが大切です。小学校でも中学校でも，考える場面は必要です。そこで先生は，考えられるような発問をしないといけません。なんのためにグループでやるのか，何のために班でやるのかが分かっていないといけません。形から入ってしまい，何を話し合っているのかわからないのであれば，やめておいた方がいいと思う例がたくさんあります。

【アクティブ・ラーニング】

アクティブ・ラーニングという言葉が出てきました。アクティブ・ラーニングは課題を解決するための主体的・協働的な学びのことを言います。「話す」「聞く」「書く」「読む」の充実を言いましたが，これがないとアクティブ・ラーニングはできません。話合いは，自分の言葉できちっと話さないと話合いになりません。人の言うことを聞かなければ話合いになりません。アクティブ・ラーニングでは，学習活動に「話す」「聞く」「書く」「読む」が機能していなければなりません。アクティブ・ラーニングについて，文部科学省のパンフレットの中には，「考えて深める場面」「発表の場面」「書く場面」などの多様な学習例が示されています。もちろんこれはグループでやることもあるし一人でやることもあります。私は，アクティブ・ラーニングは形だけでなく，一人で考えることもアクティブ・ラーニングだと思います。頭の中がアクティブかどうかです。川柳を紹介しておきます。

～話合いテーマ知らずに話合い～

今何の話をしているのかよくわからないが，話合いをしています。

ある小学校３年生の教室で，「話すこと」や「聞くこと」についての心得が，掲示板に貼ってありました。小学校でよく目にします。ところがこの小学校では，発達段階を考えて心得の表現を工夫したり，付け加えたりしています。そして，全ての学年で「話すこと」や「聞くこと」の力を付けようとしています。小さい時からこれらの力を鍛え，意識させることは，難しいですが大事なことです。

発問と言語活動についてお話します。勉強が苦手な子は「学習言語」（先生が言っていること）が難しすぎるし，先生の説明や問いの言葉が充分に理解できません。学校の先生はここを読み解かないといけません。また，考えを深める発問では，追加の理由や解釈を更に問いかける必要があります。意図して発問を入れ，授業を深めることで，言語活動が鍛えられていくわけです。

また，要約やまとめの記録，メモを取ることは，「小さい子だからできない」と考えずに，たとえ上手でなくてもやらないといけません。「記録・要約・比較・言いかえ・図示できる力」は，学校だけではなく一生ものの力になります。

ジグソーパズルは時間がかかりますが，最後のピースをほり込んだらみんな同じものに仕上がります。いわば，ジグソーパズルは，今までの教育に例えることが出来ます。一方，レゴでは色・形・組み合わせが多種多様で，出来上がった作品は一人一人違ったものになります。これからの教育は，同じものを追うのではなく，どんどんレゴ型になっていかないといけません。一人一人は違うし，その時その時のベターな答えを言語で結び引っ張り出さないといけません。世の中どんどん変わっていき，マニュアル通りにはいきません。子ども達の言語を充実させ，納得解・最適解を求める教育を目指してください。

【まとめ】

言語活動の充実は目的ではありません。「班でグループ作って話し合いなさい」「なんでもいいからまとめなさい」ではなく，「話す」「聞く」「書く」「読む」力を伸ばすための手段です。「今，こういうことを書かせた方が，こういうことを考えさせた方が，子どもに力がつくだろう」ということを考え抜いてほしいです。そのためには，常に先生はどうすればよいのかを考え続けてほしいです。先生の言葉や文章で子どもは育ちます。先生の言葉の質は子どもにうつります。一日一緒に学んでいて，先生の言葉が乱雑なら子どもの言葉も乱雑になります。先生が丁寧に話していたらそのクラスの子どもも丁寧に話します。特に小さい子どもはそうです。

皆さん方は先生を目指していますから，子どもが好きなことは当たり前だと思います。では，目の前の子どもを伸ばして，１人で生きていける力をつけてやろうという気概をもっていますか。子どもたちが大きくなったら，自分で生きていけるようにしてあげられるか，ということです。子どもが学校から帰るときは，朝来たときより，賢くなっていないといけません。だから，子どもは明日も来てくれるのです。同時に自分自身が学び続けて，心も体も健康でなければいけません。自分は不摂生して遅刻しておいて，「遅刻はあかん」では説得力がありません。

年齢が低いほど，子どもは先生の後ろ姿で全てを学んでいきます。丁寧で優しい先生だと子どもも優しくなります。先生は，“学び”と“世の中”を繋ぐのが役目です。ずっと素直でないといけません。子どもに要求することが自分にできない人は，学校の先生になってはいけません。「素直に」「真面目に」と子どもに言っている先生が，違反をしてはいけません。小さな交差点の信号が赤で，車が来ていなくても，多くの人が横断していても，「やっぱり自分は待とう」と思い，実行できる生き方ができる人が先生になってほしいのです。教師は，崇高な仕事です。

京都市教育学講座 10

「市民・地域とともに進める京都の教育改革 ～信頼される教員～」

京都教師塾塾長　高桑　三男

【はじめに】

最初に教員を目指す者に求められているものについて考えます。教員は社会にある一つの職業です。したがって，まずは，一般的に社会の中で働く大人としての資質が当然のごとく求められています。2つ目は，専門性です。これは授業をするための力だけではなく，教育の理論，教育的な課題に対する最新の知識も含め，より高い専門性が求められています。3つ目は，子どもの力を引き出すためのより実践的な指導力です。教員を志す段階から学校現場の実態に触れながら，多くの先輩の取組から学ぶことが大事です。京都教師塾はここから生まれています。4つ目は，教員の特性としての責任の自覚です。教員は，大人を代表するモデルとして信頼できる大人でなければなりません。そして，確固たる教育理念をもち，より良い子どもを育てることに喜びを感じながら，学び続ける人であることが求められています。

【教育改革】

なぜ教育改革が求められているのか。グローバル化，国際化，情報化などにより，世界が大きく変わってきています。一方，家庭の状況を見れば，育児放棄，児童虐待などが大変マスコミを賑わせています。他にも放任や過保護，薬物乱用の問題などもあります。また，いじめ，不登校などにより公立学校に対する信頼も揺らいでいます。新しい状況への対応と，公教育の信頼回復が同時に求められています。日本の教育界は大変に厳しい状況にあります。

そのような中，学校選択制，民間人校長，全国学力・学習状況調査の公開は，外からの改革になります。教員だけに学校教育を任せていては変わらないので，外から変えていこうとする力です。他方，コミュニティスクール，小中一貫教育，体験学習は，内からの改革になります。やはり学校が責任を自覚しながら学校自身から変わっていくことがなければ，教育改革は進みません。内にいる人間，教員がこの事態に対

応してこそ学校は再生すると思います。

教育改革の中で求められている力の一つに「組織的・計画的な学校経営」があります。これまで一人一人の教員がそれぞれのクラスで頑張れば学校教育は何とか進められました。教育の現場をイメージする時に，「クラスの中で教員が一人と多くの子どもたち」を原風景のように感じますが，今では，それは一部だけを映した姿と言えます。

全ての問題がクラスの中だけで解決するはずがありません。専門家などの外の力も借りながら組織的な取り組みを進めていかなければなりません。校長を中心として学校教育目標の下に教員が一丸となって取り組んでいく教育が求められています。

【京都市の教育】

京都市の教育は，市民ぐるみ・地域ぐるみの教育であることが一番の特色です。学校が中心となり，まず学校自身が変わることで開かれた学校づくりが進みます。学校から情報を発信し，保護者・地域などに呼びかけます。保護者･地域，そして，企業･大学などの力を借りて，さらには外部の専門家にも学校教育へ協力してもらいます。それぞれが役割と責任を果たし，知・徳・体の調和した子どもを育てます。

京都市では，地域ぐるみ・市民ぐるみの教育の充実に向けて，学校・家庭・地域が共に行動し，子どもを育むために，全ての小学校と多くの中学校などに学校運営協議会を設置しています。幅広い分野の方々に，委員として学校運営についての意見や承認をいただくだけでなく，多くの方々のボランティア参画を得て，「子どもたちのために何ができるのか」を共に考え，行動しています。

また，「子どもを共に育む京都市民憲章」（愛称：京都はぐくみ憲章）を平成 19 年２

月５日に制定しています。子どものいる人，子どものいない人，観光客も含めて一人一人の大人が子どもたち一人一人に何ができるのかを努力目標として，子どもを育む取組みです。教育問題は保護者や学校関係者だけのものではなく，社会全体で取り組む必要があり，そのために大人全体に対する行動規範を示しています。

【一人一人の子どもを徹底的に大切にする】

様々な先駆的な取組以前に，「一人一人の子どもを徹底的に大切にする」という理念が京都市教育の伝統です。

子どもを大切にするとは，子どもたちの育っている環境や背景にまで迫り，学校での姿だけではなく，保護者の願いや思いも理解することです。特に課題を抱えた子どもたち，困りを抱えた子どもたちに積極的に関わります。子どもを置き去りにしません。できない子どもがいれば，その子こそを大切にしていきます。

日々の学校教育の中で，子どもたちの興味関心を超えて全ての子どもたちが参加している取組みは授業です。一日に多くの時間を割いているのは授業です。子どもたちは授業を受けるために学校へ来ています。授業の中で一人一人の子どもに対して，大切にされているという実感を持たせていただきたいです。

授業では，知識を身に付けるだけではなく，学ぶ意欲・姿勢も育ててもらいたいです。授業を授業の中だけで完結させるのではなく，大きく膨らませてください。子どもたちが，授業を受けることで，夢や希望を与えられ，努力できるようになってほしいと思います。

授業は，ある日，突然，変わることはありません。毎時間の授業を一度に変えるのは難しいですが，できることを一つ一つ積み上げていくということがなければ授業は改善していきません。そのためには，皆さんがどのような思いをもつかにかかっています。規範意識や仲間づくり，また，自分自身の人生の目標さえ作れるような授業，授業後に子ども自らが学習していきたいというつながりを生ませられる授業を目指してください。地道な積み重ねの授業が子どもたちの未来につながっていきます。

【最後に】

教育の主人公は子どもです。「これだけのことをしました」と教員がいくら胸を張っても教育をしていることにはならないと思います。子どもが変わり，力をつけ，「こんな子どもに育ちました」とならないといけないと思っています。そういう意味では大変に厳しい結果責任です。教員だけの力で子どもは育っていくものではありません。保護者と協力し，さらに多くの人たちの力を借りないと子どもは充分には育ちません。

教育は現実と理想との葛藤です。夢ばかりを追いかけても教育はできません。現実の前で悲観して立ち止まっていても教育はできません。現実を踏まえ，子どもたちの置かれている状況を把握した上で先に向かいながらも，このような子どもになってほしい，という理想を掲げて進んでいただきたいと思います。

教員は，大変やりがいのある素晴らしい仕事です。子どもたちと成長する喜びがあります。子どもたち一人一人を育てることは未来の社会を作っていくことになります。皆さんが教員になる夢を大いに膨らませて，教壇に立たれることを心から願います。

【塾生レポート】 受講して学んだこと

私は中学校の国語科の教員を目指しています。高桑先生から,「教員を目指す人に求められるもの」として,「教員は社会人である」こと,「教員は専門職である」こと,「教員は実践家である」こと,「教員は大人の代表である」ことをふまえて，社会性，人間性，より高い専門性，実践的指導力，責任，自覚が挙げられました。これらは当たり前に必要な力ですが，今の私には足りない力が多いように思いました。私は京都教師塾の塾生になってから，実地研修，学校ボランティアで実際の学校現場にふれる機会が多くなりました。その中で学ぶことは多く，貴重な体験をすることができたと思います。しかし，そうして生の学校現場にふれる度に，自分の能力の低さを痛感しています。特に「実践的指導力」は学習指導においてだけでなく，生徒指導においても，自分の力の低さを感じ，“もっと分かりやすく説明できるようになりたい”“効果的な指導ができるようになりたい”と思っています。だからこそ，これからも学校ボランティアを継続して行い，現場で学んでいきたいと思っています。6月に教育実習もひかえていますので，そこでも多くのことを学びたいです。高桑先生がおっしゃった「目標をしっかりともち，向上心，人の意見を素直に聞く姿勢をもち，柔軟さ」をもって，学び続け，より良い教員を目指したいと思いました。

教員を目指すにあたって不安がたくさんありますが，どんな教員になりたいのか，どのように成長したいのか，明確に自分の目標を定めて教員採用試験に臨みたいです。私はこれまでに，大学や学校ボランティア，京都教師塾など様々な場で，たくさんの人々と出会いました。これからもこのような貴重な出会いを通して，人間として，そして，教員を目指す者として，成長していきたいと思いました。

コメント

完璧な人は誰もいません。常に「不安」からのスタートです。壁を乗り越えるために，自己分析し，一歩を踏み出しましょう。PDCA サイクルで自己変革をしてください。「その進む方向」を掴み，学び続ける実践的指導力をつけるために，実地に学び，よい先生を目指してください。

第 10 期京都教師塾　塾生の卒塾時アンケートより

【塾全体に関するもの】

○同じ志がある仲間との討論や，10 日間の学校実地研修において，教育に関わりたいという思いと，京都市の教員として働き，子ども一人一人を大切にした教育をしていきたいという思いが強くなった。（小学校志望）

○京都教師塾では，中学，高校，また，特別支援学校など幅広く様々な校種について勉強できたことにすごく満足している。縦の連携，つながりについて勉強できたことが本当に良かった。（小学校志望）

○大学での学びは新しく知ることが多かったが，知識として覚えたり，机上で考えたりすることがほとんどであった。京都教師塾では，学校現場の経験者から話を聴くことができ，教職に対する考えがまだまだ浅いことに気づけた。実践的な学びを得ることができると同時に，他の塾生から新たな気づき，視点を得ることができた。（小学校志望）

○「絶対教師になるぞ」という気持ちが塾に来るたびに強くなった。先生方の熱心さは塾生にとって励みになっている。（中学校志望）

○教師がとても大変な職業であることがわかった。でも，なぜか「教師になるのをやめよう」とは決してならなかった。むしろ「なりたい」という思いが強まった。これが京都教師塾の秘めた魅力だと思う。（高等学校志望）

○教師塾では，自分が教育に携わっていく，という当事者意識がより高められる。（高等学校志望）

○講義に加えて，実践の場において自ら体験したことで，教師の「厳しさ」「喜び」を感じることができた。（総合支援学校志望）

○自らが動くことによって学びがどんどん深まっていくことは，塾ならではの学びであったと感じる。（養護教諭志望）

【教育学講座】

○講義を通して教師に対する不安がたくさんの希望に変化しました。分散会で意見交流する中で，自分以外も同じように不安を抱えていることがわかり，その不安に対してどのように取り組むべきかなど話し合うことができた。（小学校志望）

○求められる教師像，教育課題について，それぞれの講義から様々な角度で話をいただき，多面的，多角的に捉えることが重要であると考えることができるようになった。（中学校志望）

先輩の授業に学ぼう

○レポートには，書きたいことがたくさんありすぎて，わかりにくくなったものの，見返すと，たくさんの学びがあったことが伝わってくる。（小学校志望）

○レポートを書くことで，言語化されるので，頭の中が整理される。さらに記録として残り，成長を実感することができた。（中学校志望）

【授業実践講座】

○指導案の作成に関しては，改めて授業の中でのポイントを学ぶことができた。また，周囲の人と意見交換をすることで，一人で指導案を作成するよりも視点を広げることができた。また，模擬授業では同じ一時間の中でもそれぞれの工夫や課題を学び合うことができ，とても授業の力をつけることにつながると感じた。
（小学校志望）

花背山の家

○講義を通して様々な観点から授業を構想したり，指導案の書き方を学ぶことができた。模擬授業では，同じ教材を扱っていても塾生によって授業が違っており，生徒役の塾生からの感想や先生の助言から学びを深めることができた。（小学校志望）

○模擬授業において，実際に学校で教師として働かれた先生からの意見，指導というのは自分では気づかない，経験に裏付けされた鋭い視点から語られるものであり，非常に参考になった。
（高等学校志望）

【学校実地研修】

○教育実習中には気づくことができなかった教員と保護者，地域の方々との連携について学ぶことができた。（小学校志望）

○実際子どもたちが日々，何を見てどのように感じているのかを近くで見ることができた。これにより，教師として何が必要なのかを考えることができた。（中学校志望）

○すばらしい栄養教諭の先生と出会う事ができた。その先生の学び続ける姿勢を見て，自分もさらに勉強し，成長しなくてはならないと決意した。（栄養教諭志望）

【フィールドワーク】

○研究発表会で，授業参観し，児童の意見の取り上げ方，授業の流れなど多くの学びを得ることができた。（小学校志望）

○授業実践の見学では，授業をつくる難しさを感じるとともに，先生方の熱い思いもたくさん感じることができた。（中学校志望）

【塾で力がついたこと】

○教師としての責任と自覚。使命を悩み続け，それでも前進していくことは私の勇気にかわった。そして，悩んだ分だけ子どもたちへの指導にプラスになると信じている。
（小学校志望）

○現場での様子を聴き，自分だったらどのように対応するか考える習慣がついた。
（中学校志望）

○大学との一番の違いは，グループでの話合いで，お互いの意見をすぐに交換でき，そこからも学びを深められることだと思う。また，GA からアドバイスをいただき，話し合うことで，さらに学びが深まる。自分で考えて伝えるだけではなく，他者の意見も加えて自分の中で深め直す習慣と力がついたと考える。
（中学校志望）

○自分がどんなことができるか，何ができるかということ考え，より自分の思った通りの行動に近づけるようになった。（高等学校志望）

○自分が知りたいことをどんどん自分の意思で吸収できる所だと思う。志の高い仲間がいて，その仲間との意見交流を通して，自分も意見を伝える力がついたと考える。
（養護教諭志望）

卒塾式

【後輩へのメッセージ】

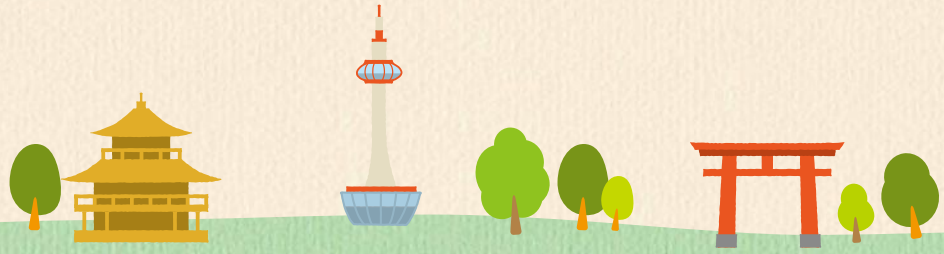
○私は教師塾の講座を受けて，自分がどんな教師になりたいのか，より明確にイメージを持つことができた。先生方からの熱い思いを受け継ぎ，共により良い教育をつくっていけると嬉しい。
（小学校志望）

○教師をしたときに大事にしなければならないこと，考えなければならないことがいっぱい学べる場である。教師になることに目が行きがちであるが，その後，自分がどんな教師になるかを考えられる時間だった。（小学校志望）

○経験の豊富な先生方が講義し，それを踏まえて考えや学びを共有できる分散会があり，多くのことを学べる機会がある。知識の習得だけではなく，経験もできる貴重な場である。（中学校志望）

○塾の講義が本当に毎回楽しみだった。大学では学びきれない実践的な内容であると思う。すべてのスタッフが丁寧に対応していただけるので，安心して，実地研修，フィールドワークに臨むことができた。（高等学校志望）

本冊子は，文部科学省の初等中等教育等振興事業委託費による委託事業として，京都市教育委員会が実施した平成 28 年度「総合的な教師力向上のための調査研究事業」において作成したものです。
したがって，本冊子の複製，転載，引用等には文部科学省の承認手続が必要です。



京都市教育委員会
京都市総合教育センター　教員養成支援室
〒600-8023 京都市下京区河原町通仏光寺西入
TEL：075-342-3883　　FAX：075-342-3886

子どもたちの笑顔のためにできることから始めませんか?
京都はぐくみ憲章